私たちのクラスとその同窓会ふくます会（会誌29稀）のこと

土川眞夫

このたび京都大学理学部数学研究科同窓会が作られることおめでとうございます。卒業生にとっては、若い日の学びの場で得た絆を、世代を通じて深められる場所が出来ることは大変有難いことです。全卒業生のための同窓会の立ち上げは、設立や今後の維持のなどを考えると、なかなか大変なエネルギーのいることです。お世話をされている皆さんには感謝の外ありません。

私は昭和６年（１９３１）に生まれ、昭和25年京大理学部に入学し29年（１９５４）に卒業しました（修士課程　３１年終了）。教養課程の２年後数学科に分属されて以降、３０名弱を数学クラスの友人として皆さんと付き合ってきました。２９年度卒として、ここ15年あまりまえに同窓会（ふくます）を再開し、会誌（29稀）も作って、毎年親睦を重ねてきました。いまやその友人たちも老いのなかで半数が亡くなり、結局いま残っている中で“おまえがやれ”とばかり、私がその同窓会のことを語れという次第になったようです。自身存在感のある学生だったとは思えず、適任ではありませんが、少しだけ書かせてもらいます。

大学入学当時はまだ敗戦からそれ程たっていない時期で、世の中は極端に厳しい状況から少し緩み始めていました。この間に教育制度も大きな変革もありまして、新たに義務教育としての中学校が作られで、それまでの中学校（女学校）は高校となりました。一方それまでの大学予備門的エリート校三高などの旧制の高等学校や、旧制の高等専門学校などは新しい制度の大学に組み入れられ、修業年年限は３年から４年に変わりました。つまり教育は底上げされ、高等教育は大衆化されて始められたことです。私たちたちはその新しい大学制度での２年目の学生で、新大生と言われやや軽く見られていたように思います。まだ生活のための物の少ない情勢で混乱も残っており、学生運動も盛んでした。

喜んで京大に入学し、数学も学び始めました。教養では解析は大西英一先生、幾何は佐藤三郎先生に習いました。解析は高木貞一著：解析概論第一章にあたる部分、講義には高等数学を学ぶ意義を感じ新鮮な気持ちでした。少し分かった気にもなりましたが、細かいところまで分かることなく、演習問題もまだよく解けない状態でした。幾何の方は解析幾何、前期末パスカルの定理が出て来て、その証明には美しいと思いましたが、∞の点が直線上のそこに出てきて、その意味がよく分からず困惑、後期は２次曲線のことで、話としては理解しても、計算に煩雑さを感じました。２回生のときの２次曲面にいたってはなお更でした。田舎から出てきた頭の固い学生にはこれは壁です。試験の成績は悪かったこと、それでも数学科に分属させて貰いました。

私たちは当時の左翼的学生運動には*真面目*に加わりました。数学クラスが出来て早々（つまり３回生になって早々）、大学のある学生が学生運動のすえ処分されるということに憤慨

し、その抗議のためにクラス自治会として総長室の前で座り込みすると決議、夕方時計台下に集まりました。20 名ぐらい居たと思います。そこへ教室から連絡があり、教室へ帰ってくるようにと教授室に呼び寄せられ、先生方（先生方は、教授として蟹谷乗養先生、秋月康夫先生、小堀憲先生の時代）から軽挙妄動はやめよとばかり、説得されました。それに負けじといろいろと青い理屈も並べ立てて議論しましたが、結局その日夜遅くなって議論はおわり、座り込みはしなかった。その後もストライキや教室封鎖なども行った記憶があります。後年の大学紛争のような激烈という程でもなかったが…。

先生方との話し合いはその後講義室で何回も行われました。本来先生方に対決的に物申し要求する姿勢のはずですが、学生側としては微妙なものもあります。胸の中には、普段の難しい講義も全部分かりたいという思いは勿論ですが、あの原書も読みこなしたい、量子力学の本も読みたい、哲学もマルクスも読みたいと、取り留めもなく広がる思いの中での無力感を抱えております。そんな空気もあって教えられる場にもなってしまいました。伊藤清先生は京大に来られたばかりの若い教授で、あるとき、「自分もマルクスをノートも取りながら勉強もしてみたが、そういうものは数学に比べれば結局学問になっていない」という意味のことを言われた。当時学生の間ではマルクスは金科玉条のようなものとして議論されていましたので、伊藤先生の言葉は“へえ“と思いつつも、先生の学問に対する気迫と自信を感じさせられるものでした。もっと若い松本誠先生、溝畑茂先生もときには出席されて、自分自身の勉強・研究のことを実体験的に話され、話は自分たちの脳裡に浸みこんで来たように思います。先生方と話し合いは、結局講義以外で貴重なことを教えられたという記憶しかなく、自分たちが何を言ったか覚えがありません。

クラス自治会なるものは講義が終わったあと、その講義室で何回も行われ、デモに行く話やら、コンパをしようとか、クラス会誌 EOUS を作ろうとかの相談やらをやっていたわけです。講義あとの片付けづけをする用務員さんが来ても、私たちが部屋から出ていかないので困っていました。しまいには松谷さんという初老のひとが出てきてわれわれを追い出しました。時には喧嘩になっていました。松谷さんは当時数学事務の人で、一徹な彼には学生たちはよく叱られました。最初はムッとしたものですが、言葉の端に、ときに励ましもあったりして、次第に気心が知れるようになり、叱られると「はあーい」と素直な調子の返事をかえした覚えもあります。松谷さんはそういう人柄であったと心地よく思い出すことです。

クラスのコンパで思い出すと、御所の東側にある梨木神社の大部屋を借りて、すき焼きが定番でした。先に言ったように、当時はまだ敗戦しばらくのこと、神社も少し荒れて寂れた感じで、酒を飲んで少しぐらい暴れる学生に貸してもいいということだったのでしょうか。先生方も出席され、秋月先生はよく三高漕艇部のうた「琵琶湖周航のうた」を歌われていました。後年加藤登紀子が歌いヒットしたあの歌です。秋月先生はボスめいた野人的な感じの人で、数学教室数え歌も歌っておられた。これは旧七帝大らの数学教室をそれぞれ揶揄したもので、京大の分は

二つとせ、古い都におりがら、京都娘にあ惚れられぬ、ほい、ほい。
と記憶しています、皆も歌詞も節も興味を持って聴き入っていたように思います、何番はどこそこの大学でどんな歌詞だったかと確かめあっていましたら。まねして歌うものは居なかったように思います。卒業の時のコンパでは、秋月先生は数学をよく勉強せよ、一生に一つでもよいから論文をかけと言われました。蟹谷先生は「もうお前らなんか怖くないぞ」と言われ皆を笑わせました。「ごちゃごちゃと言いいにやってくる noisy な学生たちが出て行ってくれてすっとするわ」といっているに見えますが、あとで考えると、われわれは先生方の手玉にとられ、結局掌の上で愛されて転がされていたのだと感じがしてなりません。

もう正確には覚えていないが、平成 10 年 2 月立命館大学衣笠キャンパスのある一室で、一井啓さん、西野利雄さん、濵田雄策さん、島田三郎さんや私、土川らがたまたま出会いました。５人で会うのは久しぶりで、彼らは元気で、昔と少しも変わっていないように見えました。当時私も京都に住まっていたので、帰り道はひとまず一つ方向で歩きました。衣笠から平野神社、北野天満宮の境内を横切り、千本釈迦堂、相国寺への寄り道を経て出町の河原のところで解散しました。その道々で、29 年卒の同窓会を立ち上げて旧交を温めようではないか、という話になりました。自然なことです。早速、森住弘さんにも加わってもらって企画・相談をし、6 月の末に、岡崎の“私学の宿　白川院”にて集まることが出来た。梨木神社以来４５年ぶりのことであります。

集まるに際して、数学教室の 1997 年の卒業者名簿も連絡の為に役立った。すでに小針明宏さんや押坂晃さんが亡くなっていますが、とにかく連絡した３０名弱中 15 名の出席でありました。久しぶりにお互いの顔を見て喜び合ったものであります。いろいろ話し合っているうちに、このような同窓会を毎年開こう、同窓会の名前を付けよう、会誌を作ってそれぞれが書こういうことになりました。会誌は投稿した原稿のコピーを綴じたものでいい(A4 紙)。また漫然と食事して楽しむだけでも結構であるが、誰かを講師にして談話会もしょうと濵田さんから提案され、全員の賛同をえました。以後同窓会も開会の挨拶、経過報告、会計報告、談話会、懇親会という総会形式になる。書き上げると大仰になるが、手順としてどこでもそういうものです。

実際にはその年の１１月京大会館の１室で談話会を行い、森住弘さんは「能」について、神部彰さんは「ダイオキシン類とヒトの健康」について講演された、２人ともそれぞれ持ち味の興味あるは話で、多くの質問のでたことである。また、森住さんからは Oslo の公園で撮られた N.Abel の写真を見せて貰いました。

ここで私たちの同窓会の名をふくます会としました。ふくます会は福増会であり、ふくマス会であり、ふくらます会でもあります。また、会誌の名は広中さんの提案で“２９稀（ニクマレ)”に決めました。彼の提案書には、(原文のまま)

名称　　２９稀（ニクマレ）

その心は

1）「稀」は、まばらに植えられた苗のさまから、「まれ」の意を表す。

2）唐の詩人、杜甫の「曲江の詩」の詩の中の一節に、

酒債ハ尋常行ク処ニ有リ、人生七十古来稀ナリ

とあって、昔から７０歳生きる人は稀である考えがあって、７０歳のことを「古希」といってお祝いする習慣ができた。しかし、それは、人生５０年と言うのが通念だった昔の話である。三年前の平成８年１０月の毎日新聞夕刊の一面に、１００歳以上の日本人が７０００人を突破し、その時点での最年長者は１１２歳（偶然ながら山口県のお婆さんだった）と言うニュースが載っていた。現在日本の長寿社会では８０歳が平均的常識の範囲に入る。したがって、単純計算では

７０　×　８０　／　５０　＝　１１２

となり、現代感覚での「古稀」とは１１２歳と考えても良いのではないだろうか。

3）憎まれ（29稀）ッ子世にはばかるとの言いがあるが、はばかるとは元気で長生きするを意味する。（原文終わり）

とあり広中さんらしい風格のある文章です。これに対して、近藤亮司さん（２８年卒）は２号で、（以下原文まま）

古希について一言

毎日江頭に酔いを尽くして帰る

酒債は尋常行くところ有り

人生七十年古稀なり

「毎日酒を飲みに行き酔っぱらって帰る。そのため先々の知人宅や飲み屋に借金が出来た。しかし、どうせ人間は、七十歳生きることは滅多にない」とでも訳すのだろうか。詩はこの後どう続くか知らないが、「どうせ何時までも生きているわけはないのだから、あとはどうにでもなれ」といささかやけっぱちの気持を詠んだものと推測される。杜甫４７歳の作だそうで２９稀２ページの換算式によれば現在の７５歳となり、まだわれわれの年齢より上である。このような詩がなんとなく有難い。長生きをする言葉としてのこるとはさすがの大詩人も考えていなっかったに違いないが、元気者揃いであった２９卒の方々が上手に名前を取り入れたのには感心した。（原文終わり）これ以上会誌の名について言うことはあるまい。

こうして２９稀は発刊され、第１号は一冊づつ表紙裏に例のAbelの銅像の写真が張られ、目次、２９稀の命名の心（広中）、同窓会誌発刊にあたって（森住）、そして皆の書いたものと続く。森住さんのものは、アーベルについて小堀先生著「大数学者」からの引用しつつ、銅像を撮った時の様子、くわえて自分たちの来し方を思い、最後にわれわれはまだ若いと締めくくる。

こののち１４号まで続くが、それぞれの個性が発揮された文章が投稿され、面白い読み

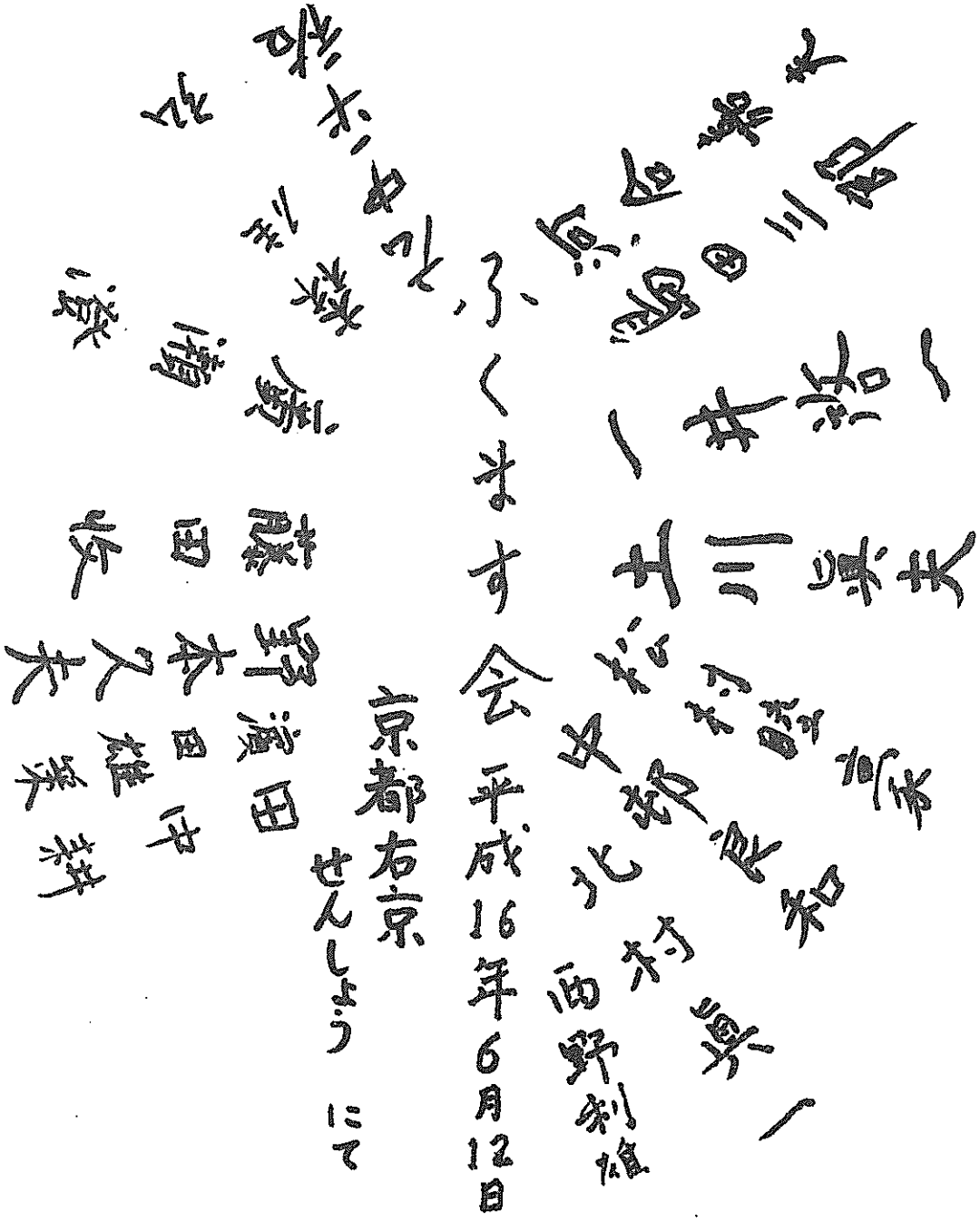
物となっていると思う。一つについてあらましをご紹介しよう。一井さんの一文である。以前の「ドイツ 10 マルク紙幣」には表面にガウスの肖像、そのわきにガウス曲線、裏面には測地義が描かれているものがある。広中さんが見せてくれたものである。皆は、これはいい、コピーして 2 号誌の口絵として載せようとなった。そこは紙幣のこと、考えてみればそんなことが勝手に出来るか心配なことである。一井さんは持ち帰って、長男の方と相談し、紙幣の上に明瞭に copy と書かれたコピーを作った。それでも問題なく会誌に載せられるかまだ心配である。東京のドイツ大使館までを含むいろいろ処へ馴れない心で、聞き歩くという話しである。一井さんはその詳しいことを、13 ページをかけて書いている。コピーそのものは３号で載せられた。

もとより私たちの同窓会は老いの集まりで、昔を思い出してがやがやとやってきました。人生として当然ながら、毎懇親会ごとに２９卒のものは去っていく。その中で２９稀の書き手も少なくなり、それを埋めるべくとは失礼な言い方だが、２９卒でないが個人的に親しい方々にぽちぽちと加わってもらい、２９稀にも書いて頂いた。三木良一先生もその一人で、手書きの味わいを感じつつ、昔あの頃のフランス留学のことも読むことが出来ることになりました。個人的に加わって下さる人々のお蔭で、会える人、読むことが出来る文章の幅も広がりながらも、懇親会は１６回、２９稀は１４号まで続きました。

濵田さんは会誌を編集・制作していることでもあり、ほぼ毎号に文章を載せています。内容はパリを出発地とし、またそこに帰るヨーロッパ自動車旅行の話です。パリで車をレンタルし、奥様同伴でスペイン、イタリヤ、北欧諸国などをめぐる。‘９５年から’０５年の期間だから、最後の旅は彼の７３歳の時です。彼の先生で、共同研究者でもある J.Leray 先生を訪れて親しく数学を語られたことをはじめ、訪問の地の大学でのシンポジウムで発表したり、諸所を巡って感じたことを彼の文化的知見にあわせて披露されていました。旅の途中、どこで何を買って食ったとか、今日はどこへ泊るか、行った先でホテルを探し廻ったとの類のことも、細かに記していますが、胃を患って小食な彼がどこからそんなエンッルギーを補給していたのか、聡明頑強に振る舞う姿には感心します。

私たちの同窓会が幕を閉じたのは、濵田さんが平成２６年（‘１４）３月に永眠され、継続出来なくなったからです。実際彼は、とくに一井さんも亡くなったここ近年は、ほとんど彼ひとりが事を引き受けて呉れていました、２９稀についても、奥様のサポートのあったこと思いますが、原稿集め、編集・制作などなど、どれも大変な手のかかり、気遣いがいる仕事です。彼が皆をリードしてきたと言うより、彼の世話の上に会があったと言うべきでした。彼の持つノウハウも受け継げられず、わたしたちは自分たちの同窓会を閉じざるをえませんでした。残りのものが簡単に集まる機会は作って、逝った仲間のことを偲んではいますが。

ちょうど京大数学科同窓会がたち上がること、同窓会が世代を繋いで受け継がれていき、豊かに人の集まる場になることを願っています。

下記のものは、平成１６年６月の第７回ふくます会の出席者で、料亭より色紙が渡され一同が署名した。これは２９稀６号に掲載されたものである。

場所　右京区西院安塚町２３　　京料理せんしょう